

せ、私どもは沢山の方言を教えられたものです。実は中西君はスラバヤ在動中、賜暇帰朝し新妻を携えて帰任し、私どももジョン・グループを倒しました。二十数星霜を閲し、幾多の風雪を共に凌いだこの糟糠の妻、曉子夫人を昨年八月二日亡くし、眞実諦め切れぬ境地に陥りました。私ども友人はこれを励まし、辰巳会や盟誓会のあるたび毎に出席を勧め、気分転換を計らせるのに努力したのですが、遂に力及びませんでした。また自分が落付かぬから待てとばかりの返事でした。嗚呼天はこの好漢に命をかさず、召し上げられて奥さんの

### 大阪朝日神戸版掲載(四一・四・三)

## 鈴木商店の倒産後四十年

大正七年八月十二日、神戸市生田区相生町、国鉄神戸駅東にあった鈴木商店の東店が築まった市民に焼打ちされた。これがいわゆる「神戸の米騒動事件」だ。大正三年に米の小売価格が一キロ当り十銭六厘だったのが、大正七年には二十一銭三厘に暴騰した。怒った富山県の漁師たちが米蔵を襲った。これがきっかけとなって米騒動が全国的に広がった。神戸では「鈴木商店が買占めをし、海外に流している」とのうわさが広まっ

て、世界は商業市場に大手筋として知られるようになった。大正八、九年は年間取引量が十六億円に達し、さすがの三井もおよばなくなかった。しかし、このときが頂点でそれから後、没落への道を歩みはじめた。

鈴木商店は明治十年、鈴木岩治郎が創設、神戸で砂糖商をはじめた。同二十七年岩治郎の死後、金子直吉が経営して乗出して以来、しょう糖と砂糖の製造販売を足がかりに成長、第一次大戦のとき鉄・船の買占めが成功してすでに財界のAクラスに仲間入りしていた。同商店にとって焼打ちはひとつのつまずきだったが、二週間後には早くも同商店は立上る。焼け跡にバラックを建てて営業を再開した。そして一通の電報が日本一の貿易商への跳躍台になった。内地各地からきた見舞電報のなかに「ロンドン支店長から「慶賀にたえず」というのがあった。会社の幹部たちはびびりしたが、金子直吉だけはびびるをたいてはめた。小さな日本国内のことに目を向け

て、群衆がおしかけた。火をかけたうえ、同商店の大黒柱、金子直吉の首に十萬円の賞金までかけられたといわれる。

だが、買占めの真相は米不足を補うための政府の指定商として海外から米を輸入して倉庫に保管していたことであつたらしい。大正三年ごろ豊作続きのため米があまり、米価が下がったので、政府の命を受けた鈴木商店が米価の安定をはかるため過剰米を海外に輸出していた。この印象が市民の間に

あつて輸出のための買占めと誤解されたという。

伸び、世界の商業市場に大手筋として知られるようになった。大正八、九年は年間取引量が十六億円に達し、さすがの三井もおよばなくなかった。しかし、このときが頂点でそれから後、没落への道を歩みはじめた。

神戶の一砂糖商が五十年余り第一大財閥を築いたのは、金子直吉の事業欲があつたればこそだった。金子は会社の買収、新設、関係会社への融資など、もうかりそな企業には次々と手を出して経営の範囲を広げた。資金は貿易による利益と銀行からの借入金に頼った。利子の支払はほう大になった。不況になると関係会社の設備が遊び、赤字はふえるばかり。投機的な「直吉商法」は大正九年ごろから行詰りをみせはじめた。打開策としてまたも台湾銀行からの融資に頼った。

世界を相手にもつと貿易を伸ばすべきだ、という意味だった。その年の十一月、第一次大戦の休戦にともなう海運界の不況と船舶の大暴落で五億六千万円の借金ができたが、わざわざを転じて福にしようと思年、再び訪れた好景気に積極的な買いつけ策が功を奏した。同商店の貿易量は飛躍的に

助も活発だった

助も活発だった

助も活発だった

台銀の鈴木への貸出しは大正九年、八千万円だったのが、昭和二年には三億七千万円にもなつた。台銀の貸出しの六割五分以上も占めた。一方に破たんが起れば共倒れする。台銀融資はドロ沼的になつた。政府も放っておかず、再三救済策を考えたが、議会や日銀などの反対があつて思うにまかせず、金融恐慌の昭和二年四月、台銀は混乱のうちに全店休業にはいり、鈴木商店も財界から姿を消した。結局、鈴木商店は恐慌の中心的な役割を演じたのだが、直吉の商法が余りにも台銀など銀行の借入金に頼つたため、利息の重さに押しつぶされて倒産したともいえる。

今も昔も変らぬものは？  
昭和初期漫画

